

## 解説

## 格差社会における希望学の意義

—希望学とは何か—

玄田 有史  
(東京大学社会科学研究所助教)

## 希望学とは

東京大学社会科学研究所(以下、東大社研)では、〇五年から研究所を挙げて、「希望学」というプロジェクトを始めてきている。希望学とは、どのような学問であり、何をめざしているのか。東大社研のホームページに「希望学は、思想・制度研究、経済・歴史分析、社会調査など、研究所の全精力を結集し、希望を社会科学します」と記されている(<http://project.s.u-tokyo.ac.jp/hope/>)。

高齢社会の進展、疲弊した地域経済、財政赤字の累積、グローバル競争の激化、教育制度の行き詰まり、その結果としての格差の拡大懸念など、日本社会の未来を語る言葉

は、概して重苦しい。社会全体にとつての見通しの暗さは、希望の喪失という表現につながっている。そんな状況を生きる個人のあいだで、「希望」はいかに位置づけられているのだろうか。

現代は格差社会の一つの表れとして、希望を持てる人と希望を持ってない人に社会が分断化されつつあるという(山田昌弘『希望格差社会』〇四年、筑摩書房)。とすれば、希望を持てる人とそうでない人に、どのような違いが横たわっているのだろうか。

希望学では、〇六年一月に東大社研の永井暁子助教授を中心として「仕事と生活に関するアンケート調査」という全国郵送調査を実施、二〇歳から五九歳の二〇一〇名から回

答を得た。その結果を紹介しながら、希望学から見える現在の日本社会の姿を考える。

## 希望の実態

二〇〇〇年に発表されて大きな話題となった村上龍氏の小説「希望の国のエクソダス」(文藝春秋)で、社会に反乱を企てる一人の中学生は発言した。「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」。

本当に、日本という国に生きる人々の多くは希望を持っていないのか。調査では、将来実現してほしいこと、もしくは実現させたいことという意味での将来に対する「希望」を保有しているかをたずねた。その結果、希望があると答えた人は、二〇一〇名中一五七三名にのぼり、全体の七八・三%に達した。希望の喪失という言葉とは裏腹に、成人の大多数は将来に対して希望を持って生きている。

希望学では、〇五年五月に「職業の希望に関するアンケート調査」というインターネットを利用した調査も二〇代から四〇代に実施した。それでも希望の有無について質問したが、やはり回答者の七六・五%は自分には希望があると答えている。複数の異なる調査を通じて、八割弱の大

人は、なんらかの希望を持って生きていることがわかる。

では、希望の本身とは何だろうか。「仕事と生活に関するアンケート調査」では、希望があると答えた人に、何に係る希望であるかもたずねた。選択は、仕事、友人関係、恋愛、社会貢献、結婚、健康、遊び、容姿、学習、家族、その他から複数回答とした。その結果、最多は、仕事に関する希望(希望を有しない人も含めた回答者全体の五一・八%が選択)であり、続いて家族(同じく三六・二%)、健康(二九・五%)、遊び(二四・七%)となった。先のインターネット調査でも、希望の内容は仕事に関するものが圧倒的に多かった。希望という言葉で多くの日本人が想起するのは、仕事にかかわる将来の夢や目標である。

## 希望と経済力

では、希望を持てる人と持てない人の違いはどこにあるのだろうか。格差社会が語られる中で、経済的に余裕のある人と、そうでない人のあいだで階層化が進んでいるという指摘もある(橋本俊詔・浦川邦夫『日本の貧困研究』東京大学出版会、〇六年等)。とすれば、経済力の差が将来の選択や自由度に差を生み、富める人のみが希望を持てる状況も生

まれつつあるのだろうか。

調査では希望の有無といった主観的現実と同時に、昨年一年間の税引き前年収といった客観的現実に関する質問もした。本人の年収と希望の有無との関係を図に示したのが図1である。図をみると、年収八〇万円以上の人々の八三・二％が希望を有すると答えたのに対し、年収なしの人々では七七・五％に限られるなど、一定の差が見られる。

ただし、そのあいだの年収では希望保有者はすべて八割弱程度に限られている等、その差は微妙である。実際、年収階層ごとの希望保有割合の差は、統計的な検定によると有意な差と認められない等、収入の差がそのまま希望の格差につながっているとは言い切れない。

収入を本人のものでなく、本人が属する世帯全体の年収として見た場合にも、結果は同様である。年収が八〇万円以上の世帯に属する個人は、年収が三〇〇万円未満の世帯員に比べ、希望を有する割合が約五ポイント高い。しかし中間層まで含めると、その差は大きいといえず、世帯年収の差による希望有無に、統計的に有意な差は見られなかった。

これらの結果からは、現在の経済力の多寡がそのまま希

望の有無につながっているとは考えにくいように思われる。

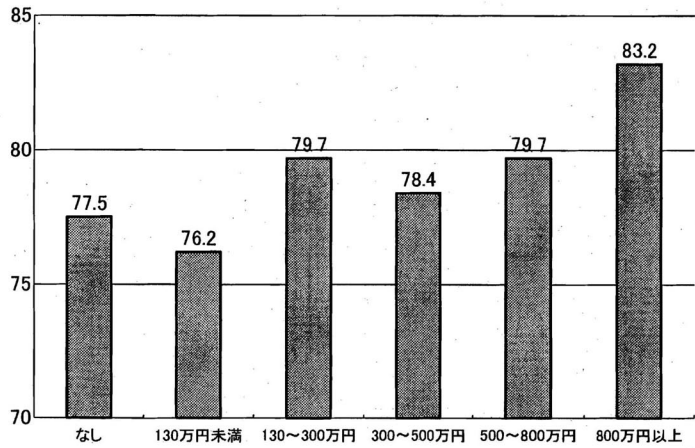
### 生まれ育った家庭環境

では、経済状況と希望には何ら明確な関係は見られないのだろうか。もし関係があるとすれば、現在の経済状況ではなく、過去の生まれ育った家庭の状況かもしれない。

調査には「あなたが中学生の頃、あなたの育った家庭の経済状況はいかがでしたか」という質問がある。その回答ごとに現在希望がある割合を求めると、「豊かだった」が八二・九％、「どちらか」といって豊かだった「が七九・七％」、「どちらか」といって豊かではなかった「が七五・八％」、「豊かではなかった」が七五・九％であり、子どもの頃の家庭が経済的に豊かであったほど、希望を持ちやすい傾向が見られる。

現在の格差論議でも、家庭の経済力によって選択出来る教育環境に違いが生まれつつあるという指摘がある。裕福な家庭の子どもは教育投資を進める一方、社会階層の低位にある子弟ほど「がんばっても仕方がない」と諦める「インセンティブ・ディバイド」が懸念される(荻谷剛彦「階層化日本と教育危機」、有信堂高文社、〇一年)。本人の選択を超えて、生まれ育った家庭の経済環境が、教育を通じて本人の

図1 本人の年収別にみた希望の保有割合(パーセント)



将来の稼働能力を左右すると同時に、将来の展望としての希望の配分にも影を落としているのかもしれない。

ただし、先のインターネット調査で同じ質問をした際に

は、中学生の頃の家庭の経済力と希望の保有状況のあいだには、明確な関係が観察されなかったのも事実である。家庭の経済力が希望に与える影響について、確定的な結論を得るには更に慎重な検討を要する。

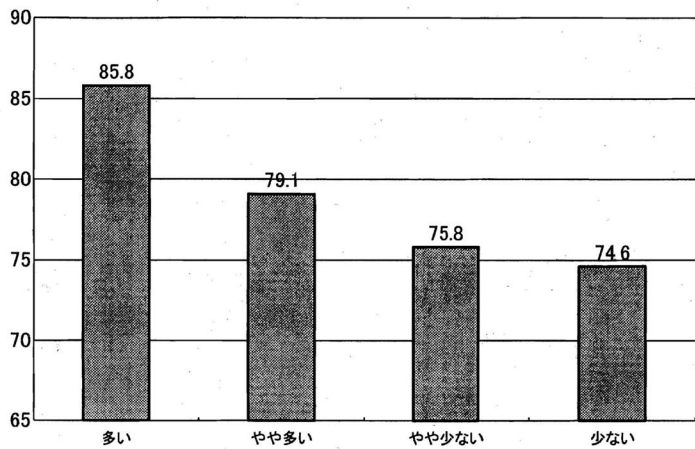
### 期待と信頼の重要性

それに対し、希望学がこれまで実施してきた二度の調査を通じて、希望に明確な影響を与えている共通の社会的要因があった。

その一つは、育った家庭環境であっても、希望の形成に差を生んでいたのは、経済状況ではなく、家族から注がれた「期待」だった。図2には「子どもの頃、あなたはご家族から期待されていると感じていましたか」という質問への回答ごとに現在の希望の保有割合を示した。期待を強く感じていた場合ほど、現在希望を有する割合が高くなっており、その差は統計的にも有意である。

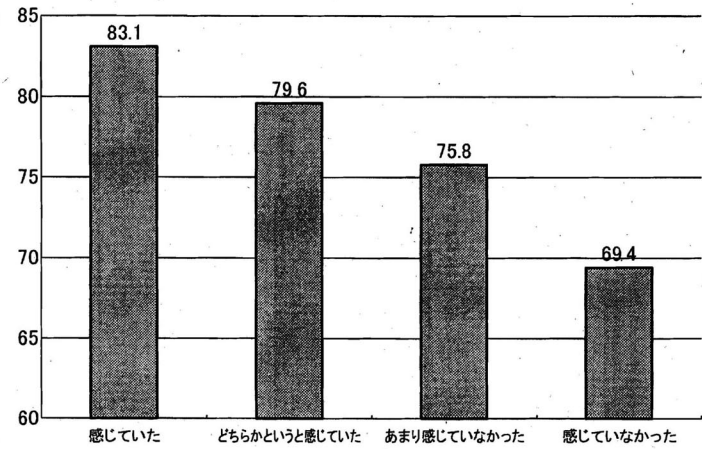
子どもにとって、進学等への親からの期待がプレッシャーとなり、期待された目標が叶えられなかった場合、親や家族との不和や自分を認めない社会に対する不信を招き、失望を深くすることはあるだろう。しかし、調査結果を見

図3 友人の数別にみた希望の保有割合(パーセント)



○六年、九九〜一〇〇頁)  
友人からの承認が「自分が存在してもいいのだ」という存在意義につながり、それが将来への希望につながるという

図2 子どもの頃の家族からの期待別にみた希望の保有割合(パーセント)



るかぎり、全体としては期待をかけられることは、本人の潜在価値を認識し、その実現に邁進する原動力となる可能性があることを物語っている。調査ではさらに、期待と

時に家族からの「信頼」を子どもの頃に強く感じていた場合ほど、やはり希望の保有につながっていた。  
生まれ育った環境のなかでの日常的な期待や信頼を支えとした未来への原動力こそが、希望なのかもしれない。

### 社会的に孤立した存在

もう一つ、希望の保有に明らかな影響を与えていたのは、なんといっても友だちの存在である。図3は「あなたは友人が多いと思われませんか」という問いへの回答ごとに希望の保有割合を示したものである。友だちが多い場合ほど、希望を保有する割合は高くなっている。

先述の永井暁子氏は、友人が希望を与える背景をこう説明する。「私たちは社会生活を送るなかで、学生であれば学校の成績や容姿、社会人になれば職場での評価など、社会からの様々な評価を下される。そのような社会が下す評価と違って、友人は別の自分、(本当にそうかどうかは疑わしいが)「自分らしい自分」(素(す)の自分)「本当の自分」を認めてくれる。友人からの承認が、役割や立場だけではない他の人とは違う自分という感覚を与えてくれるのだ。」(友だちの存在と家族の期待「玄田有史編著『希望学』中公新書ラクレ、

考えには説得力がある。だとすれば、格差社会が懸念されるなかで真に危惧されるべきは、友人や知人といった他人とのつながりを欠き、社会的な孤立のなかにあって希望を失っている人々の存在ではないだろうか。

いじめや不登校、ニートや社会的ひきこもりの他、年代を超えて急増中の単身生活世帯、増加のきざしを見せつつある母子(父子)世帯には、ときに家族との関係にも困難を抱えながら、社会的な孤立を深めている人々が少なからず含まれる。そんな事実こそ、真に懸念すべき現在の日本社会の姿がある。

### 希望学のこれから

今回は紙幅の関係で紹介できなかったが、現在、希望学では、失望や挫折を経た上で形成されてきた希望ほど、個人や社会にプラスの影響をもたらすという仮説を多角的に検証中である。そのため、過去に多様な困難を経験しながら、新しい希望の創造に努力する岩手県釜石地方の人々に対して大規模な聞き取り調査を実施したり、別途新しいアンケート調査も企画している。希望学の成果が、格差社会に冷静に立ち向かうためのヒントになればと願っている。